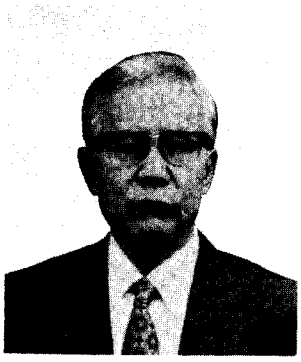
巻頭言

日本熱測定学会の任務

日本熱測定学会長　藤代　亮一



日本熱測定学会の前身である熱測定懇談会が第一回の熱測定討論会を大阪大学の松下会館で開いたのが今からちようど10年前の11月19日であった。それは当時の熱測定の貧困さを憂えて，関教授を長とする世話人グループが自然発生的につくられ，果してうまく行くかどうかという大変な危惧をおかして推進されたものであった。しかし幸いなことには，当日予期に反して堂にあふれる方々の参加が得られたのであった。いまにして思えば，今回の１０周年記念講演をして下さった神田，斉藤，宗宮，田宮の諸先生のようなすぐれた先駆者がわが国における熱測定のあけぼのの時代にしっかりと種をまいていて下さったからであって，討論会は単にそれに火をつけたに過ぎなかったのである。

それ以来１０年，討論会は年とともに盛大になり，外国との交流も盛んになり，その基礎が充実するに伴なって１９６９年には熱測定研究会へ移行し，さらに1973年には日本熱測定学会へと改組されるに至ったのである。

わが国での熱力学，熱測定部門の長い間の沈滞の理由の一つは，このようなじみの分野に比べて分子構造分野の余りにも化やかな発展にあるように思われるが，このような時期にこそ，最も基礎的な熱分野の復興こそ望まれるものであって，本学会の設立は重要な意味をもつものであろう。このような熱分野の復興はわが国に限らず，諸外国でも行われているのであって，ニューズレターでご承知のとおり，すでに早くCalorimetry Conferenceが設けられているアメリカはもちろん，ソ連，イギリス，フランスなどでもすでに行われており，最近ではドイツでもこの分野の部会が設けられようとしている。これらの国々と協力して熱分野の研究活動を拡大して行くことは，本学会の基本的な責務の一つであって，この進路は，すでに関，神戸両教授などによって著実に引かれており，われわれはこの進路に進んで行かねばならない。ICTA国際会議が１９７７年京都で行なわれることになったのもその一つである。

さてこのように毎年討論会が多数の会員の参加のもとで開かれ，国際的にも注目されていることは大変結構なことであるが，詳細に見ると必ずしも手放しでは喜べないような気がするのである。すなわち討論会での発表数は若干は増加しているものの，発表者の顔ぶれはそれほど変らず，研究者の固定化が起こっているように思われる。それは，わが国において熱測定分野の研究者が局在的であり，ある意味では後進国の様相を示しているのではないだろうか。もちろん，熱測定のような古典的物理化学分野の基礎がしっかり置かれた西欧諸国と違って，わが国では，１９世紀末から入ってきたこれらの分野がしっかり根を下ろす間もなく，新しい物理化学の分野に席じんされてしまい，われわれの諸先輩の非常なご努力にもかかわらず沈滞の泥沼に入いりこんで行ったのであろう。こうしてわが国での沈滞は西欧諸国に比べてはるかに深刻なものであったであろう。したがってこの沈滞から抜け出しかけたいま，いろいろな形でしこりが残こってくるのも当然なことかもしれない。

もちろんこのような難関を克服するには，最も基礎的な熱測定の分野にすべての人が関心をもって頂くようにすることから始めて，あらゆる面の研究者の増大をはかり，非局在化を推し進めることが必要である。そのためにはいろいろ方法があろうが，要は基礎的な啓もう活動を活潑に行なうべきであろう。昨年７月に行なわれた生物化学セミナーとか，本年開催が予定されている講習会などはその最も望ましいものの一つであろう。こうしてわが国の熱測定の態勢の基礎をしっかり固めて行くことは，国際的協力と並んで本学会の最も重要な任務である。

いずれにしても討論会発足１０年に当たり，すべての会員諸兄から学会の運営や行事について積極的なご意見を頂いて学会の発展に寄与して頂くことを期待する。